サービスラーニングで学んだ事

社会福祉学部社会福祉学科２年　和田　將吾
活動先：NPO 法人学童保育ざりがにクラブ
ゼミ：村上　徹也　先生

私はサービスラーニングに行ったことにより多くのことに気づくことができた。まずダメなことをダメだということの大切さに気づくことができた。子どもと接する中で、このことを疎かにすると怪我などにつながると感じた。遊んでいる中で、子ども同士だとどこまでやっていいのか判断ができないときもある。それを見過ごして遊んでしまうと怪我につながってしまう。その時に大人がこれはダメと注意することによって怪我を防ぐと同時に、子どもはこれ以上やってはダメなんだと気づくことができる。実際活動中、自分も一緒に遊んでいて、これ以上エスカレートしたら危ないと感じることが何度かあった。このような場面で注意することが子どものためであり、怪我なく活動をするために必要なんだと気づくことができた。

このことを実践するには、大人の目線と子どもの目線の両方を持つ必要がある。大人の目線とは、子どもと遊んでいるときも一歩引いた目線で物事を見ることだ。子どもの目線とは、子どもの目線に合わせて遊んだりすることだ。子どもといち早く打ち解けるには、やはり上からの目線ではなく目線を合わせて遊ぶことが大切だ。子どもからすれば、私たち学生は大きくて上から見られていると感じるだろう。そういった中で目線を合わせると案外簡単に打ち解けることができる。しかし遊んでいるときもずっと子どもの目線でいるのではなく、一歩引いた目線でいることが必要である。これを実践することで上記でも述べたような行動ができると考える。

次に、学生企画としてビンゴを行った際、学生だけで進めることがあった。この場合、子どもの立場に立てば、自分でやってみないと楽しくないと感じてしまう。実際に、子ども自身がくじを引いたほうが盛り上がった。子どもたちに自分も参加しているということを実感させることで、子どもが飽きることのない企画ができるということに気づくことができた。この出来事から相手の立場に立って行動することの大切さに気づくことができた。これから実習などでも、相手の立場に立って行動することが大切になる。今回の活動で気づいたことを忘れないようにし、今後の活動に活かしたいと思う。

次に、子どもの個性を認めてあげることの大切さに気づくことができた。子ども１人１人の個性がある。それを認めることで、子どもは自分のことを分かってくれていると安心すると思う。１人で遊ぶのが好きというのも個性だと思うし、様々な個性があると思う。これらをしっかり理解してあげることにより、関わり方が変わってくると思う。子どもの個性を理解することにより、より密度の濃い関係を築くことができると感じた。

次に障害に対しての知識が不足しているということに気づくことができた。活動先には、

障害をもっている子どもが来ていた。実際接してみるとその日によって機嫌が違ったりするので、前の時と同じ接し方ができず苦労した。障害への知識が不足していたため、この障害はどのような特徴があるのかなどがわからず活動中かなり苦労した。今までの講義などで障害について学んでは来たが、実際自分自身の力にはなっていなかったということに気づくことができた。今後は障害について学びを深めるとともに、知識だけではなくボランティアなどで実際に行動してみて、自分自身の力にしていく必要があると感じた。

今回サービスラーニングの活動先は、デイサービスへの訪問を行っていた。現代の社会は核家族が増えてきて、おばあちゃんやおじいちゃんと触れ合う機会が減少した。そうしたなかでデイサービスへの訪問は、現代の社会ではなくなってきた触れ合いをする機会になっていると思う。高齢者と触れ合うことで、子どもはいつも子どもたちと遊んでいるような力ではなく、高齢者に合わせる力を高め優しさが生まれる。さらに、いつもはない触れ合いをすることで、新たな刺激になると思う。また、子どもと触れ合うことで、高齢者も今までにない刺激と元気をもらっているような気がする。このようにお互いにメリットのある関係や活動は今後も続けていく必要がある。

しかし地域とのかかわりで課題を挙げるとすれば、デイサービスだけではなくもっと広く地域の人とかかわる必要があると考える。広くかかわることで法人自体を知ってもらえ活動の範囲が広がると考えるからだ。具体的な案を出すとすれば、１人暮らしの高齢者とのかかわりを行っていくことがよいのではないかと考える。１人暮らしの高齢者は、日ごろかかわる人が少ないので子どもとかかわることで元気にもなるし、孤独感から解放されると思う。これを定期的に行うことで孤独感から解放されるのと同時に地域とのかかわりが増え、今より地域と密な関係になるのではないかと考える。

現代の世の中の地域課題としては、地域の中のつながりの希薄があげられると思う。今の世の中、隣に住んでいる人を知らないなどよくいわれる。一昔前だったら隣に住んでいる人を知っているのは当たり前というような時代だったが、今はそのようなことはない。地域間のつながりが希薄になったことにより、現代の社会では孤独死などがよくある。昔は早く気づくことができたと思うが、今ではかなりの日数が立ってから発見されることが稀でない。これは、つながりが希薄化してきたからこそ起こる問題だと考える。

私の実家のある地域では、まだまだ地域のつながりが残っている。どこの人かはわかるし、隣に住んでいる人を知らないはずがない。このような状態にあるのも地域での行事が存在していることが要因だと思う。私の地域では、祭りは地域総出で行うビックイベントだ。この祭りがあることで、地域の人が外へでて交流することにつながっており、つながりが生まれているのだと考える。都会のど真ん中で祭りをやるのは現実的ではないが、なにかイベントなどを行いかかわりを作っていくことが大切であると考える。これは全国の地域に言えることである。今後地域のつながりを復活していくことが、悲しい孤独死などを減らしていくための第一歩だと考えるとともに、私自身地域につながりを取り戻す方法を模索したいと考える。